

『新青森市史 通史編第三卷 近代』

本康 宏史

本書は、既刊の資料編（近代1・2）をもとに編纂された『新青森市史』の「近代」編である。先行する通史第二巻が「近世」を、併刊の第四巻が「現代」を扱っており、両巻をつなぐ、明治四年（一八七一）の廃藩置県から昭和二〇年（一九四五）の終戦に至るまでの時期を対象としている。すなわち、現在の青森市の骨格が形成された時代をさまざまなテーマで紹介したもので、「昭和の大合併」以前の旧町村部の歴史を含む「地域の通史」としては初の試みであるという。

さて、青森市は、城下町が発展した他の多くの県庁所在地と異なり、藩政時代の「商都」が、「県都」として性格を大きく変えた地方都市である。本書の基本的な問題意識も、藩政期の「商都青森」がいかに近代的な「港湾都市」として発展したかという点にある。こうした視点をもとに、全体は三章で構成されている（ちなみに、同じ通史編でも「原始・古代・中世」巻は、章を下位に配した「部」構成をとっている）。なお、各章は「明治・大正・昭和」の元号年代に準じた時期区分（歴史認識）を基本としている。

第一章 棧橋時代の青森市―県都青森の誕生―

第一節 県都の誕生 第二節 交通・通信の整備 第三節 青森市の誕生 第四節 県都青森の学校と教育文化 第五節 流通都市を形成

した諸産業 第六節 歩兵第五連隊と雪中行軍―北の軍隊― 第七節 浅虫温泉・合浦公園・野木和公園 第八節 県都の衛生・災害対策

第二章 青森築港をめざして―大正期の青森―

第一節 大火後の街並み作り 第二節 貿易港として発展する青森港 第三節 産業・生活基盤の整備 第四節 大正二年大凶作の衝撃 第五節 運輸・流通の発展 第六節 陸奥湾沿いに栄える諸産業 第七節 役場の文書と青森の近代

第三章 港湾都市の繁栄―昭和前期の青森市―

第一節 繁華街となった青森市 第二節 都市計画 第三節 戦前期の諸産業 第四節 動員された市町村民 第五節 近代青森の文化芸能活動 第六節 青森大空襲

第一章「棧橋時代の青森市」では、県庁移転のみならず、「青函航路」の開設を契機として、湊町であった青森が「北日本における枢要な交通・流通の拠点」に位置づけられていく過程が明らかにされる。具体的には、「御一新」直後の青森町の「衰微」と振興、県庁移転、神仏分離、交通インフラの整備（東北、奥羽本線の敷設と北海道航路）、市町村制の制定にもなう都市と農村の格差と社会問題、近代化の過程のなかで教育が果たした役割などが叙述される。また、諸産業（林業、漁業、商業）の展開や軍事面でのトピックにも紙幅が割かれ、大衆文化の拠点としての浅虫温泉や合浦公園の賑わいなども詳細に描かれている。

第二章「青森築港をめざして」では、明治二七・四三年の大火を契機に、近代都市として変貌していく青森市の姿と、それを支えた産業・交

通の様相をまとめている。具体的には、大火後の防火対策と街並み、のちに市域に包括される「油川町」の誕生、さらに、庶民の娯楽や青年団処女会の活動にもふれている。とりわけ、第二章で多くの頁を占めているのは、運輸・流通を軸とした産業の発展、なかでも「青森開港」と「青函連絡船」を契機とする経済的展開である。もちろん、海といえれば北洋漁業に関係する漁民も多く、造船業の芽生えにも注目している。このほか道路や水道など生活基盤整備の一方、相次ぐ凶作とその対策、こうした社会の矛盾に起因する労働・農民運動の展開にも目配りが及んでいる。

第三章「港湾都市の繁栄」では、昭和前期におけるモダンな港湾・商業都市ならではの新文化の誕生（繁華街の形成・市公会堂・聖徳公園・合浦公園）と市民による文芸・文化活動、さらには、身近な市民生活が語られたのち、「青森空襲」に至る戦時下の様相を描いている。この間、都市計画が導入され、地域の基盤が整備されるとともに、一方で、農村恐慌による貧困と身売り・出稼ぎなど、厳しい現実にも直面していく。恐慌は満州事変を誘引し、（歩兵第五連隊など）郷土の兵士は戦地に赴き、銃後の市民にもさまざまな統制が加えられた。そして、太平洋戦争末期の大空襲で県都青森は灰燼に帰したのである。

ところで、評者は、当地の歴史を改めて研究したわけでもなく、青森市内はおろか青森県内に在住したこともない、まったくの「門外漢」である。そもそも同市史の内容を云々する立場にはないのだが、同時期・同規模地方都市の自治体史を編纂・叙述した僅かな経験から、いわば

「余所者」の視点で、本書の特色を示しその責に代えたい。もちろん、各章節の記述に適切な論評を加えることも評者の力量を超えており、その点あらかじめお断りしておきたい。以下、とりあえず本書のいくつかの特色をあげてみよう。

まず、本書は、同規模の地方都市の（現代・戦後を除く）近代を扱った通史としては、かなりボリュームが大きく、記述も詳細な部類に入る。さきにした章節タイトルからうかがえるように、内容は多岐多様で、いくつかの節では、通史的な記述を超えて学術論文にちかい水準となっている（例えば「青森市の誕生」など）。それゆえ、同時期の地域史を学ぶ評者にとつても、大変示唆に富む内容であったことを、まずは明記しておきたい。大火や空襲により歴史資料が焼失、散逸し、近代史料がほとんど残っていないという事情のなかで、まさに、関係者の地を這うような資料収集と編纂の努力に深く敬意を表するものである。

項目立てとしては、自治体史に定番の行政・産業の記述に加え、青函航路や青森港築港など、交通・流通分野の叙述に力を入れていることがわかる。もちろん、その背景には、「北日本における枢要な交通・流通の拠点」としての「商都青森」の特色があるが、さらに、そうした都市の性格から敷衍して、浅虫温泉や合浦公園など、文化史・市民生活史に関する内容も豊富で、記述もそれぞれ興味深いものがある。

また、近年の「新修市史」に特徴的な動向ではあるが（高田・仙台・金沢市史など）、戦争や軍事に関する記述が、大変充実しているように思われる。とりわけ歩兵第五連隊を中心とした地域部隊の編成や戦時における動員・展開のようす、さらには、全国的にも有名な「八甲田山雪

中行軍」の経緯や陸軍大演習の実際、そして青森大空襲の被害など、兵事（軍事・戦争）にかなりの紙幅を割いていることは大きな特徴と言えるよう。

加えて、古文書や公文書の所在と調査・活用について、折々の叙述の中で触れていることも、本書の卓見として指摘しておきたい（例えば、二章七節「役場の文書と青森の近代」など）。近代歴史資料の残存率の低さというデメリットを克服すべく、行政文書の所在や性格について一つの節を設け、市民に認識を与える姿勢は大変興味深いものといえよう。

以上のように、本書が水準の高い労作であることを大前提として、紙幅が限られるなか、各章の叙述に関して気づいた点、疑問に思った点をいくつか指摘しておきたい。いわば「岡目八目」的なコメントということで、むしろ、一層のご教示をいただければ幸いである。

まず、特色のひとつとはいえず、取り上げられた項目がかなり網羅的になってしまい、逆に構成全体が捉えにくいような印象を受けた。叙述の内容が、しばしば「入れ子」状態になっている項目も少なくなく、章節相互の関係（時期的な整序）もわかりにくいように思う。とりわけ、章と節の構成に関して、編年叙述が主体なのか、テーマ性に重きを置いているのか、やや戸惑う点もあった。資料編では、明確な分野別構成を採用しているが、通史編では、大まかな時期区分（明治・大正・昭和前期）に基づき、各分野を適宜組み合わせていく方法、いわゆる「シークエンス方式」がとられている。叙述そのものは編年が基本と理解できるが、章節によっては明らかに時代が倒置してしまったテーマもみうけら

れ、前後の脈絡がつかみにくくなった。例えば、第二章は、大正期を扱う枠組みのはずだが、第二節の「貿易港として発展する青森港」の内容は、ほとんどが明治期の経緯の叙述で、大正期の話は、シベリア出兵など後段の数項目のみである。同節最終項目に付された「沿革史」編纂の経緯も、築港と歴史認識の関係を分析した興味深い考察であるが、執筆者が指摘しているのは、大正期ではなく明治期の歴史観である。なお、築港の叙述は、二章五節（大正期の修築）にも、三章二節（第二期修築）にもあり、各章間の整合的な構成が望まれるところであろう。ちなみに、三章六節の「青森大空襲」の叙述も、同四節「動員された市町村民」に続いた方が自然で、五節の「近代青森の文化芸能活動」は、特論のような形で置かれる方が、違和感なく読まれるのではないだろうか。

以上のような瑕疵は、しばしば自治体史編纂について回る陥穽のひとつであり、個々の執筆者の責任というよりは、編纂委員会全体の課題といえよう。例えば、『新修金沢市史』の通史編近代では、「概説」（本来の通史）の章を各編の冒頭に設け、その時代の全体像を概観したのち、各執筆者の「特論」としてテーマ性の濃い叙述を配した。項目の漏れも少なくないので、そうした方法が適切かどうかは判断を避けたいが、本書の場合も、古代編のように特色あるトピックを「コラム」で処理するなどの工夫があってもよかつたのではないか。

加えて、各章の記述に関しても、やや統一感が欠けるように思われる。テーマ内容が重複している項目も各章に散見されるし（例えば、缶詰製造のイタリヤ館は、二章にも三章にも同じような内容が記載されている）、叙述のレベル（粗密）もややバランスに欠ける点が気になった

(例えば、築港、都市計画、娯楽など都市形成史は極めて詳細。雪中行軍も微細なレベルにまで筆が進んでいる)。とりわけ、産業やインフラに関する分野は、叙述対象がかなり網羅的である分、構成(項目立て)が複雑になり相互の関係がつかみにくくなったように思われる。もう少し分野ごとにテーマを整理したほうが、全体像が捉えやすかったのではなかっただろうか。

同様の構成上の違和感は、三章五節の「近代青森の文化芸能活動」にもみられる。少なくとも、菊谷栄、棟方志功や淡谷のり子のように、戦前から活躍しているものの戦後の活動時期が長く、「成功」の前提として青森を離れ、活動拠点を中央(東京)に移した「偉人」らは、一般的にむしろ現代編であつかうべき対象なのではないかと思われる。ちなみに、同節では、一方で青森の文化活動を丁寧で紹介し、「伝統や習慣に縛られない進取の気性に富む人材を多く輩出する土壌が醸成された」と評価しているが、そうした「土壌」なるものは歴史分析として実証できるのだろうか。そもそも郷土出身の「偉人」を市史レベルの自治体史で取り上げて顕彰することに、どれほどの意味があるのか疑問だが(その土地に「生まれ育ったというだけの属性」でという意味で、はたして「郷土」の偉人なのかという疑問)、少なくともその人物が、地域の文化活動にいかにもコミットしたのか、あるいは、故郷を離れた後も郷土との具体的な関係性のなかで、いかなる文化活動に従事したのかという視座が求められよう(実は、金沢市の「ふるさと偉人館」でも、一応「金沢生まれ」の三宅雪嶺や鈴木大拙、「金沢生まれ」ですらない西田幾多郎らが、「郷土の偉人」として顕彰されているのだが)。その点彼らは、郷

土(地方性)に根差したイメージを保ちながらも、郷土を超えた価値(国際性・普遍性)が「中央」や「世界」で評価された結果、「ブルースの女王」や「世界のムナカタ」になれたのではなかったのか(もちろん、淡谷や棟方の業績・人柄を敬愛したうえでの行論上の疑問であることはいうまでもない)。

こうした視座と表裏をなす特徴だが、かくも膨大な項目と記述にもかかわらず、市史Ⅱ「自治体」史として、本来取り上げてよい、あるいは取り上げるべきテーマのいくつかが、意図的ではないにせよ省かれている印象がある。例えば、政治・行政に関する叙述がかなり薄いのは、「商都」だからなのか。自由民権運動に始まり、政党政治の展開や市民会の動向など、一部(民権家の文化運動など)を除いて、ほとんど触れられていない。また、北陸の地域史を研究する立場としては、北海道移民に関する叙述ももう少し厚くてもよかつたのではないか(あるいは出稼ぎが主流で、農業移民は周辺農村部を含んでも希薄なのか)。県内在住のある論者は、「弘前は歴史のある町で青森は歴史がない町」「青森市の歴史」の叙述には(略)「経緯」にはあまり意が払われない」と指摘しているが、そうした懸念は払しょくされたのであろうか。

そもそも本書は、「県都」青森の歴史像を明らかに「すべく編集されており、確かに各章の叙述からは、青森地域の多彩な歴史像はよくうかがえる。しかし、「近代都市」としての青森の構造的な特色は、残念ながらクリアな形で浮かんでこないようにも感じた。近年の都市史研究の主要な議論では、都市の空間構造と社会層の関係や周辺町村、あるいは近隣の地方都市との相互補完関係(あるいは確執)に視点が及んでいる。

本書の概要説明にも「北日本における枢要な交通・流通の拠点」というフレーズが強調されるが、その位置づけのいわば理論的な考察（構造分析）がやや薄いように感じた。もちろん、鉄道敷設の事情や青森港・青函連絡船、さらには、対岸貿易の記載は誠に詳細だが、「北日本の他都市に対する優位性」は、かならずしも証明・記述されていない（例えば、仙台や酒田・新潟など、「北日本」あるいは「日本海側」の「枢要な港湾都市」に対して、青森はどの点で凌駕しているのか、具体的な指摘や実証が求められよう）。

さらに、旧町村部（合併された町村）の歴史叙述についてもかなり配慮がなされている一方で、旧青森市街と周辺町村の構造的な関係が、県外者にはよく理解できなかった。例えば、「油川町の誕生」（二章一節）では、同町の沿革・特色は細かく書き込んであり、その実態は詳しく紹介されているのだが、肝心の青森市への編入過程や合併の背景などは、ほとんど詳らかにされない。かなりの紆余曲折があったであろうことは推定されるのだが、この点にも考察の展開を望みたいところであった（弘前や八戸との関係も含め）。

以上をふまえて、さらに付言すれば、「東北」という、日本近代の歴史のなかでかなり特殊な意味をもつ「立ち位置」とその地域性を、意図的に明らかにする叙述があれば、なお本書のスタンスが明確になったものと思われる。近年の近代史研究では、「帝国」の視点、とくに「東アジア」から照射した地域の在り方に関する議論が求められている。例えば、「北海道」との地域的連携（青函連絡船・出稼ぎなど）に関しても、「内国植民地」としての「北海道」の位置づけと、その窓口としての

「青森」の役割など、さまざまな論点をそれぞれの専門の視点から明らかにしていただきたいものである。

以上、ほとんど「ないものねだり」や「読み込み不足」に基づいた無理な注文に終始してしまった。まさに「門外漢」の戯言とご寛恕いただきたい。いずれにせよ本書は、通史としての青森の近代史を広範に示すとともに、地域史の研究書としても豊富な内容を備えており、有意義な出版であることは言を俟たない。一般向けの啓蒙書としてはやや専門的な叙述もみられるが、青森市民はもとより、地域史研究に関心のある方々にも、広く推奨しうる一冊といえよう。

（A5判、七〇七頁、二〇一四年三月、青森市史編纂委員会、

本体四八〇〇円＋消費税）

（もとやす・ひろし 金沢星稜大学教授・地域連携センター長）